

# FINE通信

今年のテーマ：癌の「勉強」

## 新潟大学名誉教授・安保徹先生の話から①

あけましておめでとうございます。

今年は、安保先生と一緒に「ガン」について勉強していきたいと思います。

- ガンは、異常な細胞ではなく、「低酸素」「低体温」のなかで、生き延びるために、生まれてきます。逆の環境を与えれば、ガンは自然退縮していきます。
- ガンは、体に悪さをする存在ではなく、「低酸素」「低体温」という体内環境に対する、「体の適応現象」です。
- ヒトの 体内深部は、酵素がもっとも活発に働ける、約37.2度を維持しています。わきの下は 36.2～3度が 平熱 となります。
- 解熱剤、痛みどめ、抗がん剤、ステロイド剤…。これらはすべて 交感神経を刺激して 血流を止め体温 を下げ、免疫力 を低下させます。
- 私は、長年の研究の中で、「生命体は自分自身では失敗しない」ことを強く実感しました
- 体は、より良い方向へと動くようにできています。
- ガンの人は、細胞に「酸素が少なく」「リンパ球の数が少ない」ことが特徴です。
- 血流 が悪くなると、細胞は「酸素不足」になります。
- 血流 がとだえると、体温 が下がってしまいます。
- ガン細胞は、「正常細胞からミトコンドリアが削られた」だけの違いに過ぎないのです。元は共通の遺伝子です。
- ですから、遺伝子レベルであろうと、細胞レベルであろうと、ガンを死滅させようとして、抗がん剤 や 放射線 で攻撃すれば、正常な細胞も、同じ遺伝子を使っているから、生命そのものが、滅びることになります。
- 抗がん剤は、兵器の マスタードガス をもとに、1950年から1960年代に活発に開発され、現在 使われている 主な抗がん剤は、この時期に出揃いました。

